



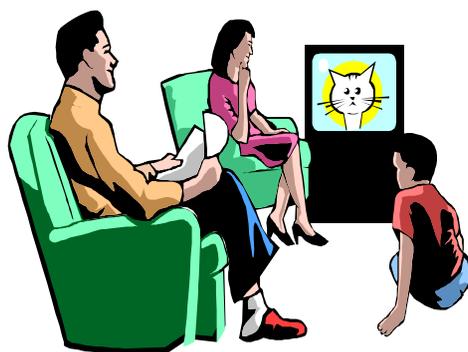
Vol.37

2010年11月25日

SOYOKAZE そよ風

【目次】

- P1 *メディア・リテラシー
- P2 *講座報告・「女と男のトレンド社会学第2弾」
*学習記録誌紹介&配布の様子
- P3 *学習記録誌を読んで
*講座報告・「幼児をもつ母親のための講座」
- P4 *運営協議会の取り組みⅠ、Ⅱ
- P5 *運営協議会の取り組みⅢ、Ⅳ
- P6 *講座報告・「女と男のトレンド社会学第3弾」
*これから行う講座のお知らせ
- P7 *講座報告「女性に対する暴力防止のための講演会」
*報告・バス研修/パネル展示
*DVブックレット紹介
- P8 *図書紹介、貸出案内、女性の悩みごと相談
*センター利用案内



メディア・リテラシー (media literacy)

メディア・リテラシーとは、マス・メディア(新聞・TV・ラジオ・雑誌など情報を伝える媒体や手段)を検証的に読み解くこと、またその能力のことを言います。マス・メディアからの情報をそのまま鵜呑みにするのではなく、批判的に解釈する力とも言えます。

メディアは社会を「ありのままの現実」としてではなく、「作られたものを伝えている」「一定の視点や視覚で再構成してメッセージしている」ので、伝達されなかった膨大な事実を削ぎ落としていることがあります。

メディアの伝えていることを、私たちはあたかも真実であるかのように理解・認識することががちです。私たちに「伝えられていない現実」がたくさんあるということに自覚的になる、それがメディア・リテラシーへの第一歩です。

メディアは情報の提供者や、情報の集まる政府・行政機関からの取材を通じて影響を受けます。また、営業・販売・広告の情報や、経営者・政治家・スポンサー等からの圧力等により、自己規制をすることもあります。また、編集・レイアウト・効果音・テロップなどの演出や、映像技法、締め切りや時間枠、紙面や行数

などの時間・空間的制約も受けます。

これらによって極端な場合には、「やらせ」「誤報」が生じることもあります。

たとえばTV番組では、「何が(選ばれて画面に)映り、何が映らないのか」「ここがクローズアップされたのはなぜか」「なぜこれが繰り返し映るのか」などに注目してみましょう。

また、登場人物の性別・年齢・職業も要注意です。いまだに残る性別役割分担や男女の上下関係など、メディア側の意図・思惑がどのようなものか、見ている人に配慮しているかどうか、その姿勢が問われます。

それには私たちからのメディアへの働きかけも大切で、メール・ファックス・電話・手紙などで、否定的な意見だけでなく肯定的なものも積極的に伝えることです。

批判的な意見は来ても、良かったという賛辞はなかなか来ないもので、作り手は“反応”を知りたがっています。意見交換することが次の番組作りの糧となり、より良いものができれば私たちもそれを楽しむことができます。



【性は多様ですと語る千田さん】

千田有紀の 「オモシロ女性学/男性学」

～講座の後にはティータイムも～

ゲストスピーカー：武蔵大学教授 千田 有紀さん

2009年秋に『ヒューマニティーズ女性学/男性学』（岩波書店）を上梓された武蔵野市在住の千田さんに、本の内容を中心にお話していただきました。初めに「ウサギにも鳥にも見える」絵、「若い女にも老婆にも見える」絵を見せられ、「視点を変えれば、見え方が変わる」オモシロさをみんなで実感し、性についても多様な視点から見ていかなければ…と話が続いていきました。

私たちはこの世には「男と女しかない」と思いがちですが、千田さんによると、性を決定する基準は9種類もあるとのこと。性染色体の構成から、「自分を男と思うか、女と思うか」という性自認、「女が好きか、男が好きか」という性的指向まで、それぞれの組み合わせから、男か女かという単純な二項対立では捉えられない多様な性が見えてくると指摘されました。

子どもの頃、過ってペニスを切除され、女の子にされてしまった『ブレンダと呼ばれた少年』のエピソードから、参加者に「あなたの子供もだったらどうするか」という質問が投げかけられ、隣り合った人同士でディスカッションをして盛り上がりました。「性器がなければ男ではないのか」「男かどうかを決めるものは何か」など、議論が発展していき、さまざまな意見が出て会場は大いに沸きました。

さらに千田さんは、性別を始め、恋愛、母性、子ども、家庭などの概念は前近代にはなかったもので、すべて近代になって発見されたと説明されました。自分たちがいままで当たり前と思ってきたことを問い直され、皆、「そうだったのか」という驚きや「目からウロコが落ちる」ような思いを感じたようです。

講座終了後はティータイムを設け、千田さんを囲んで参加者は思い思いの意見を述べ合うなど、「オモシロ」いおしゃべりを楽しみました。参加者数は女性23名、男性6名。女と男のトレンド社会学は参加者とゲストが意見交換を楽しむのがメインの講座です。また開いてほしいとの声がたくさん寄せられ、主催者としては嬉しいひとときとなりました。

※千田有紀さんは、武蔵野市男女共同参画推進市民会議の副委員長もしていました。>



【近代になって恋愛、子ども、家庭…次々と概念が発見されました】

何回も読み返したい学びの軌跡

女性セミナー「暮らしの女性学2010」学習記録誌を手に

2010年5月から6月にかけて実施した6回連続講座「暮らしの女性学2010」の学習記録誌が完成しました。9月28日(火)に受講生が集まり、できあがった学習記録誌を手に、歓談しました。「子どもが寝た後など、自分一人の時間に、何度も読み返したい」「休んだ日も、記録を読めば理解が進むので嬉しい」「この言葉を人に伝えたいと思っていたので、記録誌で再確認できてよかった」「今回のような保育付きの女性の生き方を考える講座はずっと続けてほしい」



【また集まりましょう。賛成！…話はずむ】

「受講後、物事の見方、見え方が変わってきた」などの感想を述べ合いました。学んだことが日々の生活を見直すきっかけになったようです。

他自治体の男女共同参画センターにも何冊か寄贈しましたが、そこで読んだ方から「とてもいいものなので、これを教材にグループで話し合いたい」とのお知らせもありました。記録誌を通じて、より多くの方に女性学を学ぶ意義の大切さを届けることができました。センターで貸し出しもしていますので、ぜひ手にとってみてください。

次頁には他県市から寄せられたメッセージを掲載しました。





若い女性たちが熱心に学んでいるのが分かり、センターへの来訪が、比較的年配の方が多い当方にとって、考えさせられました。いい講座をやっていると思いました。(S県)

学習記録誌を拝見し、参加者の講座に対する熱意をひしひしと感じます。武蔵野市の女性たちは幸せだと思います。(M市)

丁寧な学習の足跡のまとめを拝見し、労を惜まない良い取り組みに胸を打たれました。このような貴重な記録が、確実に市民のものになっていくことを願っています。(G大学)



こうした記録誌を目にする機会がめっきり少なくなりました。学習されている皆さんの言葉に「なんて真面目に語り合っているのだろう…」と、10年前、20年前と変わらないある種の感動を覚えます。場を提供する側が変化したのかもしれませんが。(T大学)

この実践の記録は私には心強いバイブルです。「思い」が適切な「言葉」となって並んでいるのを見るのは感動です。通勤の電車の中で何度も読ませていただきました。(K県)

明快な語り口の講義録を読んで、私も学び直しさせていただきました。(S市)

話してみよう、育児のこと、私のこと

好評のうちに終了

「幼児をもつ母親のための講座」

全5回(9/27~11/8 午前10:00~12:00)	
第1回	話してみよう、育児のこと、私のこと
第2回	子育ての責任は母親だけ？ 三歳児神話ってなーに？
第3回	公園ママ、幼稚園ママ …本当は本音で語りたい
第4回	働きたい！でも、子どもはどうする？ 武蔵野市の保育園事情
第5回	私のこれまでとこれから 子育てしながら、自分も育つ

【カリキュラム】

- 講師 -

お茶の水女子大学名誉教授
牧野カツコさん

むさしのヒューマン・ネットワークセンター長
下村美恵子



【母こそ学んで…と牧野さん】

育児中の若い母親たちは、社会との接点も限られ、まともに大人同士で話したりする機会はあまりないのが実情です。そんなお母さんたちにこそぜひ学んでほしいと企画したのが、そのものズバリの「幼児をもつ母親のための講座」でした。

託児を多く引き受けたいと、会場を広い託児室をもつ市民会館に移し、17名のお子さんを預かってスタートしました。講座が終わっても子どもがいるのを忘れてしまうほど、参加者同士で話が弾んでいました。初めは泣いたり、げんそうな顔をしたりしていた子どもたちも、大勢のお友だちとすっかり仲良しになって、なかなか帰ろうとしない子もいるほどでした。

タイトルは「幼児を持つ…」ですが、内容は女性学です。かけがえのない自分をまず大切に「自分充実」させ、子育て中こそ、将来を展望した生き方設計図を描こうと、話し合いや講義を通じて日々の暮らしの点検をしました。

「個人的な経験は社会問題に通じること」と知って、参加された方々は次第に表情がイキイキと変化し、学ぶ楽しさ、語らう嬉しさを実感されたようです。

参加者の感想は…

◆「母と子の講座」ではなく、「母親のための講座」だということ、子育てしながら自分も育つということが響いてきました。ただお話を聞くだけでなく、いろいろな方々との話し合いの時間があり、とても楽しく学べました。(参加者Bさん)

◆普段、何げなく夫のことを主人と言っていたのですが、意味に違いがあると知りびっくりしました。対等な関係にある訳なので、これからは「夫」と言おうと思います。(参加者Dさん)

◆三歳児神話のお話が興味深かったです。また「主婦たちの失語症」ということにハッとさせられました。育児は一人で頑張ってしまったらず、もっと夫に関わってもらおう努力も必要だと思いました。それには日本の男性の長時間労働を何とかしたいものだと思います。(参加者Aさん)

◆託児をお願いして参加しましたが、子どもがいなくても、こんなに集中して学べるのだと実感しました。今まではすっかり何をすることも子ども優先で、自分のことはつい後回しでした。このままでは「自分」がなくなってしまう危機感を感じました。ここで学べて本当に良かったです。(参加者Cさん)

運営協議会の見直しを始めました

—むさしのヒューマン・ネットワークセンター管理・運営のより良い方向をめざして—

むさしのヒューマン・ネットワークセンター運営協議会のあり方検討会（略して「あり方検討会」）は、市の男女共同参画推進やセンターの管理運営の充実を願って、これらに向けてどうあるべきかを徹底的に検討してみようと、KJ法による意見の集約作業を試みました。

第1回目は7月24日（土）の午前10時～午後4時まで、委員が二つのグループに分かれて、日ごろ思っていること、感じていることをカードに1項目ずつ書き出し、それらをカテゴリー化して概観し、そこから浮かび上がってきたキーワードをつないで文章にまとめていきました。

その作業の途中経過は、今夏、又エックでのワークショップでも報告しましたが、さらに、第2回目は9月6日（月）、それらの最終のまとめと振り返りの学習会をし、抜けていた課題やこれからの展望について確認しました。

協議会のあり方について、これまでほとんど全員で見直したり反省したりする機会がありませんでした。今回はその意味では大きな第一歩を進めることができました。

ただ理念を話すばかりでは先に進めない、言い放ちだけに終わらせないと、互いの共通認識を図り、一つひとつ確認しながら具体的に課題解決に向かおうと、それぞれが自らを問いながら前向きに取り組みました。そのおかげで少しずつ改善されて来た明るい部分もあり、これからが期待できます。



【これはこちらに…。まとめに懸命な委員たち】

「条例を考える会」ヨチヨチある記

2年前の秋、むさしのヒューマン・ネットワークセンターでは新たな拠点づくりにむけ連続講座を開催、当時の講師の下村美恵子現センター長は、〈男女共同参画を推進する4つの視点〉を話されました。人権の尊重、男女共同参画社会基本法、自治体の条例と行動計画、市と市民の協働の4視点は、どれが欠けても機能しない四輪駆動であることを、私は、改めて認識しました。武蔵野市には条例がありません。早速センターの運営協議会に加わり「条例を考える会」に参加しました。

市の最上位計画、第四期長期計画・調整計画に初めて男女共同参画推進の指針となる条例の検討が盛り込まれ、市のアクションプランでは、平成24年度に検討組織を設置する、とも記載されています。私たちは市民試案をつくろうと行動を開始。三鷹市は平成18年に男女平等参画条例を制定しています。市民の立場から条例づくりに関わった大門由起子さん（三鷹市女性問題懇談会会長）からノウハウを教えてくださいと勉強会を企画しました。

事前準備、作成の方法、事後の展開など興味深く聞きました。素案をつくっては検討を重ね、第一次試案、第二次試案ができたところにバックラッシュ。危機感の中で市側と調整しながら妥協の条例となったけれどカタチになったことが成果だった、との大門さんの感想でした。私たちも四輪駆動の操業にむかって条例づくり、あせらず、たゆまず、あきらめず>やっていきたいと思っています。

（むさしのヒューマン・ネットワークセンター運営協議会委員 向井一江）

目白・下落合散策〜まじつくりと女性の視点

九月二十六日(日)、穏やかに晴れた散策日和の午後、参加者8人でJR目白駅から出発して目白・下落合・中井地域を散策しました。いずれも市報を見て、ぜひ行ってみたいと申し込まれた武蔵野市民女性たちで、途中のお喋りにも花が咲きました。

最初のポイント、敷地約860坪の豊島区立目白庭園では、整えられた植栽や広い芝生に「なんて素晴らしい庭でしょう。こんなによい所があると知って驚きました」と、口々に賞賛して盛り上がりました。続いて、自由学園明日館、徳川ビレッジ、日立目白クラブ、おとめ山公園、聖母病院、目白文化村など、行く先ごとに、歴史と文化の香りに触れ、東京にもこんな所が残っていたのかと感慨深げな感想が聞けて、ガイド冥利に尽きました。

中井駅へ至る行程は7km超と、ちよっと健脚向きでしたが、ごく普通に生活する街の中に残された往時の息吹がそここに感じられ、午後のひとときを散策するには、十分楽しいコースでした。

リニューアルされた洋画家の佐伯祐三の旧宅跡佐伯公園や、最後はボランティアの解説があつて一層理解が深まった、住居跡そのままの林芙美子記念館を訪れました。普段はなかでできない散策を、楽しむことができ、快い疲れをお土産に解散しました。



(むさしの)ヒューマン・ネットワークセンター運営協議会委員 三上かおる

むさしのヒューマン・ネットワークセンター運営協議会は現在15名の委員によって構成され、市から委託を受けて、その管理・運営を担っています。毎月、運営委員会・役員会を開いて討議を重ね、センターの充実をめざしています。

運営協議会の取り組みⅣ

今年も行ってきました、又エックへ

国立女性教育会館(NWEC又エック)

一平成22年度男女共同参画のための研究と実践の交流推進フォーラム

猛暑続きの8月27日(金)午後3時半、昨年に引き続きワークショップを実施してきました。「武蔵野市の男女共同参画ー私たちに課せられたこれからの取り組み」と題して、パネラーの5人は、やや緊張の面持ちで意見発表しました。

会場からの質問は想定外のことだらけでヒヤヒヤものでしたが、終わってみれば「面白かった」「どんな質問がくるのか楽しみだった」と余裕と安堵の笑顔に包まれました。

全国各地からの参加者38名を前に、きちんと武蔵野市の状況が伝えられ、どんな意見をいただけるか期待していましたが、大部分が「熱心な取り組みをしている」「武蔵野市がうらやましい」「男女共同参画を地域で進めるヒントになった」「自らの活動や方向性を見直すエネルギーが素晴らしい」などと感想を寄せてくださいました。

ますます身を引き締め、さらに次の一歩を踏み出そうと皆で話し合い、早くも「来年も又エックに!」と意気込むメンバーもいました。昨年も経験していましたが、今回も発表準備には大わらわで、何回も打ち合わせを重ね、これがとても勉強になりました。

当日の様様については、9月22日(水)午後6時30分、センター会議室で市民の方々に向けて報告会を開きました。



▲【フロアからの質問を受けるメンバー】

▼【これは良かったという事例は何ですか?】



いまなお光彩を放つ「生活者」としての思想家

平塚らいてう — 愛と生の軌跡

ゲストスピーカー：NPO法人らいてうの会会長 / 女性史研究家 米田佐代子さん

10/30(土)
午後1:30~3:30



台風14号の接近で雨風の強まるこの日、講座には34名の方が参加し、センターの会議室は満員になり、熱気に包まれました。

講師の米田さんは武蔵野市在住の著名な女性史家で、らいてう研究の第一人者でもあります。限られた時間の中で、世間で語られているらいてう像と実際の姿との違いや、生涯お互いを尊重し愛し合ったパートナー奥村博史との関係、『青鞥』が発刊された頃の時代状況の中で、らいてうの生き方や主張がどのような非難にさらされてきたかなど、米田さんの柔らかな語り口から、じーんと伝わってきました。

しかし、らいてうは決して自分を曲げることなく生き抜いてきたこと、また博史との愛の結晶としての我が子の出産を通して、身近な生命への愛に目覚め、それが他者への愛につながって、戦争反対・世界平和希求につながっていったことなど、豊かなエピソードを交えてお話しされました。

50年近く暮らしを共にした夫、博史は「妻の白髪を幾たびもなでる」のを喜びとし、「もう10年一層良く生きようよ」と詩にしたため、らいてうを残して亡くなって行きました。そして7年後の1971年らいてうは病没します。その詩に曲がついているとのことで、米田さんが持ってきてくださったCDも皆で聞きました。会場からは次から次へと活発な質問もあり、米田さんが力を入れている「らいてうの会」の活動紹介や、



【終始にこやかに語る米田さん】

来年9月10日には『青鞥』発刊100年の国際的なイベントが開催されるとのご案内もありました。

らいてうの生き方の魅力と、それを語る米田さんの魅力をたっぷり感じる事ができ、私たち自身の生き方を改めて見つめ直す貴重な時間になりました。

米田さんも「新しいらいてう像をおそろおそろ紹介してみたけれど皆さんの共感を得られて嬉しかった」と述べていました。



【外は大雨・・・それを忘れさせるお話が続く】

～らいてうの孫・奥村直史さんもみえました～

らいてうのお孫さんである奥村直史さんも出席され、参加者と一緒に米田さんのお話を熱心に聞き入っていました。「世間では立派な人、強い人と、とかく女傑イメージで見られたが、家ではいつも縮こまっているおばあちゃんで、人の中に出ていくのが苦手なうえ声も小さく、立ち居振る舞いもゆっくりだし、原稿の筆も遅くて要領が悪く、不器用な人だった」しかし、「思ってしまったこと、知ってしまったこと、原子爆弾のこと」など、言わないでいられないことはキッパリと言う、書く、という姿勢で、「一人たりとも戦争で殺してはならない」という強い気持ちを持ち続け、後年は「世界平和アピール七人委員会」に加わり、熱心にアピール活動をしていたと話してくださいました。

これから行う講座のお知らせ

「別れ」が頭をよぎったら

- 私の現在を見つめてみる -
2回連続講座 (全回火曜日)

◇
2011年1月18日 / 25日
午前10:00 ~ 12:00

・講師:NPO法人Wink理事長
家族問題カウンセラー
新川てるえさん

詳しくは、市報や
ちらしをご覧ください。



女性のための アサーティブ・トレーニング講座

- 自分を生きるために -
5回連続講座 (全回木曜日)

◇
2011年 2月24日 / 3月3日 / 10日 / 17日 / 24日
午前10:00 ~ 12:00

・トレーナー：NPO法人ウィメンズサポート・
オフィス連 理事長 坂本照子さん
・チューター：男女共同参画推進事業コーディネーター
下村美恵子

もしかして、それはDVかも・・・。

10/23(土)
午後1:30~3:30

～あなたの身の回りでこんなことが起こっていませんか？～



土方聖子さん



竹内ゆき子さん

ゲストスピーカー きよ

◆多摩でDVを考える会代表 **土方聖子さん**

◆デートDV実践プログラム・ファシリテーター・ノーティス主宰 **竹内ゆき子さん**

日頃被害者支援の現場で活動している土方聖子さんと竹内ゆき子さんのお二人に来ていただき、さまざまな事例から報告・問題提起していただきました。

土方さんは元行政職員で、DV被害者との出会いをきっかけに、定年退職後、その支援に取り組んできました。

多摩地区で民間シェルターを立ち上げ、その運営に携わった経験をもとに、行政の取り組み課題や配偶者（内縁・事実婚含む）に限定されているDV防止法の対象の拡大、保護命令の拡充などの必要性を訴えていました。

武蔵野市のDV支援施策についても今後の更なる充実努力に期待していますと述べていました。

一方、竹内さんは「DV被害者は悪くない、悪いのは加害者」とキッパリ言われ、アメリカでは、人前で女性に手荒な振る舞いをしているとすぐ通報され、逮捕にま

で至るというエピソードなども紹介していました。また加害者を教育して誤った考え方を正していくプログラムが重要だと主張していました。

さらに事例をいくつか紹介しながら、デートDVの実態と予防教育の大切さについても触れ、若い未婚の男女間のDVが深刻であると話されました。参加者の中には中高生や大学生の子どもをもつ人も多く、身近な問題として受け止めたようです。

「DVについてよく分かった」「行政の支援がもっとほしい」「子どもにDVの知識を伝えなくては…」などの感想が寄せられ、2時間を過ぎてしまうほど熱心な質疑応答もあり、参加者は「内容が充実していた」「有意義な講演会だった」と口々に話して帰っていきました。

市と共催で実施しました



バス研修

男女共同参画推進団体交流会

11/9(火)

今年には長野県上田市の「らいづのの家」と戦没画学生の遺作絵画を展示した「無言館」を見学しました。参加者は三十八名、らいてうの孫・奥村直史さんも同乗し、祖母についての思い出を語ってくださいました。

パネル展示

東京ウィメンズブラザフォーラム

10/22(火)・23(水)

毎年恒例の東京ウィメンズブラザフォーラムでは、都内のセンター紹介のためのブースが設けられます。今年も上記日程で実施されましたが、当センターではこれまで行なわれた各種講座の実施状況をパネルにまとめ、展示・掲示しました。

パネル展示

女性に対する暴力をなくす運動

11/12(金)～18(木)
武蔵野市役所1階ロビー

「DV防止法」成立からまもなく十年。毎年十一月十二日～二十五日は「女性に対する暴力をなくす運動」期間です。この時期、DVに関する様々な取り組みが全国で行われています。センターでは、今年もまたパネル展示を実施しました。



ブックレットを作りました！

このほど多くの人にDVの内実を理解して頂き、その防止に役立つようブックレット『許しません、DVを。』を作りました。DVとは配偶者や内縁者、恋人など親しい間柄にある男女間で起きる暴力のことを言います。暴力と言うと、殴る・蹴るを連想しがちですが、決してそればかりではありません。言葉や態度による精神的暴力をはじめ性的、経済的、社会的暴力などによる凄惨で陰湿なものも含まれます。

許しません、DVを。

パパ…ママをそんなに怒鳴らなくて…



平成22年11月

むさしのヒューマン・ネットワークセンター

ブックレットではDVによるさまざまな影響や被害者が相談しにくい事情などについても述べ、合わせてDV被害者への支援や、具体的な対応方法、相談先なども載せています。（全26ページ、A5版）

DVをどうしたら防止していけるか、私たちの問題として皆で考えるきっかけになればとの思いを込めて作成しました。

ご希望の方はセンターにお問い合わせください。

図書紹介

むさしのヒューマン・ネットワークセンター所蔵図書の蔵書一覧が、ホームページ上でいつでも閲覧できるようになりました。お探しの本、以前から読みたかった本・・・見つかるかもしれません。どうぞご利用ください。



『なぜフランスでは子どもが増えるのか』

—フランス女性のライフスタイル—

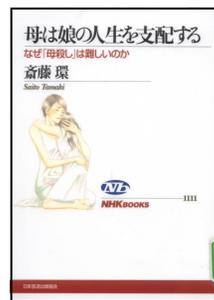
中島さおり 著

講談社現代新書 2010

少子化問題が叫ばれている昨今、徐々に出生率をあげているフランスに「どうして子どもが増えているのか」「日本が学べることは何か」を考えようと筆者は提唱しています。

フランスで家庭を築いている筆者が、フランスを日本と比較しながら読みやすく解説しています。

なぜフランスには専業主婦がないのか？フランス人たちはなぜカップルになれるのか？大人のコミュニケーションを大切にするフランスのお国柄から感じ取れます。



『母は娘の人生を支配する』

—なぜ「母殺し」は難しいのか—

斎藤環 著

NHKブックス

母と娘の関係には、思いのほか難しい人間関係が存在すると言います。大人になっていく娘、変わっていく娘との関係を、どう受け入れてどう乗り越えていくのが良いのでしょうか。母が娘を支配するとはどういうことなのでしょう。

思春期の娘を持つ方はもちろん、大人になった人にもお薦めの一冊です。また、母と娘の関係を見直す観点から社会を見ると新たな発見に至ることがあるかと思えます。

ひとりで悩まずにまずは相談を…

女性の悩みごと相談 (いずれも無料)

■女性総合相談

※50分間まで面談・予約

第2木曜 (10:00～、11:00～)

第4火曜 (13:30～、14:30～)

【場所・問い合わせ】

市民協働推進課

市民相談係 (市役所2階)

☎60-1829

☎60-1921 (予約専用)

■母子(ひとり親)・女性相談

毎週月～金 (9:00～17:00)

(祝日・年末年始を除く)

【場所・問い合わせ】

子ども家庭課

☎60-1852



【イラスト】 きたもりちか

図書貸出案内

- ・図書 3点まで 14日以内
- ・ビデオ 2点まで 7日以内
- ・DVD センター内設置のプレイヤーまたは専用PCでのみ再生、視聴できます ※貸し出しはしません

● センター利用案内 ●

開館時間 : 月・火・木・土曜日 9:30～17:00
水・金曜日 9:30～21:00

会議室利用時間

《午前》10:00～13:00 《午後》13:30～16:30

《夜間》17:00～20:30 (水・金のみ)

※予約制 (2か月前より可)・使用料無料

● 発行 ●

むさしのヒューマン・ネットワークセンター
武蔵野市境 2-10-27 武蔵境市政センター2階
電話/FAX 0422-37-3410

E-mail : mhnc@tokyo.email.ne.jp

ホームページアドレス <http://www.mhnc.jp/>